

さまざまな**角度**から**考える視点**をもつ

to think.

和田山さんは造形物の制作を通して、その作品を見た人に「多種多様な視点」をもってほしいと語ります。芸術はこうあるべき、という固定概念から少し目線を変えることで、その視点をもつヒントは生まれます。例えば、器は見るだけでなく、日常的に使って楽しめるものという視点です。そうすれば、思いもよらない料理と器の組み合わせを思いついたり、その料理を通して誰かに思いを伝えられるかもしれません。固定概念にとらわれることなく、多様な角度から物事を捉えることを、造形物を通して和田山さんは伝えていきます。

和田山真央展 陶と本の庭

会期：7/23(土)～9/11(日)
場所：和歌山市民図書館 1階・2階
展示の他、関連イベントも開催予定です。
詳細は別紙フライヤーをご確認ください。



陶芸家・和田山真央さんの作品を美術家である齊さんがディレクションし、和歌山市民図書館内に「陶と本の庭」を生み出しました。陶芸作品と本、美術と読書などの特性が生み出すアート体験をぜひお楽しみください。

関連資料ジャンルのご案内

2F

料理 **旅行** 住まいと暮らし 美容・健康
ファッション スポーツ・アウトドア 趣味実用
音楽 ビジネス IT ティーンズ 文学
新聞・雑誌 **和歌山ことはじめ** 有吉佐和子文庫

3F

総記 哲学・宗教 歴史 **社会科学**
自然科学 医学・薬学 技術・工学
産業 **芸術** 言語 郷土資料
参考図書 移民資料室

4F

児童書

編集後記

今回は、和歌山に移住された和田山さんを取材しました。大らかなお人柄の中に作品に対する強い意志をお持ちなのが印象的でした。お話を伺う中で、和田山さんという移住者を通して、加太の魅力を改めて発見する取材となりました。

目の前に広がる加太の海を眺めながら作品づくりに取り組み、まちの人々とのコミュニケーションを楽しむ。いい意味で仕事とプライベートの距離が近くなり、心地よいバランスを保ちながら毎日を過ごすライフスタイルに、憧れを抱く方も多いのではないのでしょうか？加太というまちが、移住というスタイルが、和田山さん自身と溶け込み、うまく調和していると感じました。和歌山市民図書館で新たな展示にも挑戦される和田山さん。陶器の鮮やかな色合いやその形、質感などをご来館いただく方にご覧いただき、そのひとつひとつの作品から何かを感じ、考えるきっかけとなることを願っています。

和歌山市民図書館

WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

〒640-8202 和歌山県和歌山市屏風丁 17 番地

TEL：073-432-0010

開館時間：9:00～21:00

図書館の詳しい情報はこちらから



ホームページ



Instagram

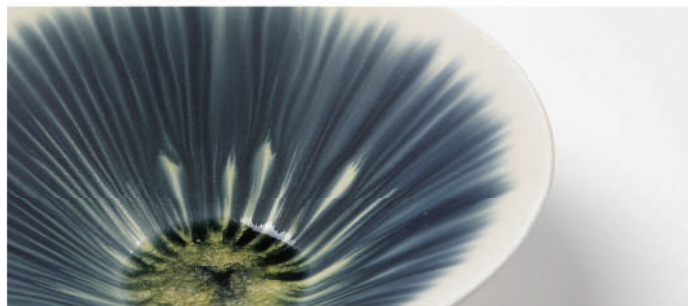


facebook

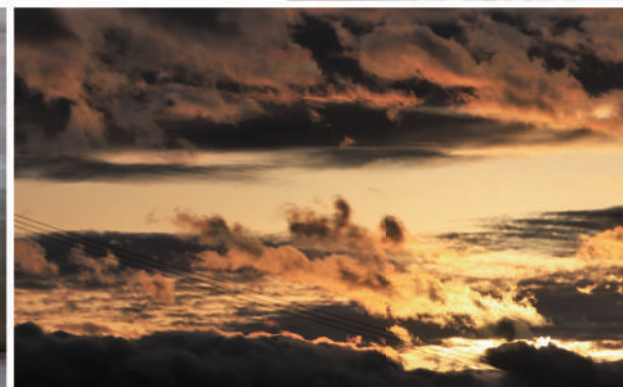
ワザ
the
WAZA for Local

7

2022.7.1 発行
TAKE FREE



移住を通じた
まちの**魅力**



取材協力：和田山真央さん

和歌山市民図書館
WAKAYAMA CIVIC LIBRARY



加太と溶け込む ライフスタイル

万葉の時代から漁見の浦と詠まれていた景勝地・加太。漁業や観光のまちという印象を持たれる方も多くいらっしゃるかもしれませんが、今回は少し違う視点から加太を見つめます。大阪から加太へと移住した陶芸家・和田山真央さん。より穏やかに作品づくりができる土地を求め、2019年から加太で暮らしています。なぜ和田山さんは、移住先に加太を選んだのでしょうか。またその後の暮らしはどのようなものなのでしょうか。移住者・和田山さんの暮らしを通して、加太の魅力に迫ります。

加太の人

people.

和田山さんが加太に移住し印象的に感じたのは、まちの人との距離感の違いでした。移住前は仕事に集中し、家族や取引先以外との会話が全くない一日もあった和田山さんですが、現在はまちですれ違う人たちと頻繁に会話を楽しんだり、工房で仕事をしながらご近所さんとコミュニケーションを取り合うようになりました。その何気ないやり取りの中に、人との関わりの大切さを感じられたそうです。加太の海に面した工房全体がまちに溶け込み、日々の生活が少しずつ変わったきっかけのひとつとなりました。

和田山 真央

Masahiro Wadayama

1985年大阪生まれ。2008年サウスダコタ州立大学卒業。アメリカ留学を機に陶芸に魅了され、陶芸の本場である日本で追求することを決意。その後数々の公募展にて受賞。2019年に和歌山市加太へ移住。

加太の自然

nature.

和田山さんの工房には大きなガラス窓があり、そこからは加太の海が一望できます。雄大な夕焼けや雲ひとつない青空、おだやかな海や荒れた海面など、その景色は一日たりとも全く同じ日はありません。さらにその景色を背景にして、加太のまちの人が行き交う日々。海や空の色、雲の動きやそこに重なる人の往来が身近に感じられ、より刺激を受けながら陶芸作品の制作に取り組める環境となりました。そうすることで普段の生活が明るくなったことが仕事にも良い影響があり、これまでは気にならなかった作品の細部にも意識が向くようになりました。感情が加太の自然に溶け込み、より発展した作品づくりを追及しています。

加太の環境

time.

加太に移住し、いい意味で「まあいいか」と生活の余白を感じられることが増えた和田山さん。便利な世の中になったからこそ、今の私たちの生活には選択肢が増え、「何かを選ぶ」という行動に負担を感じることもあるのではないのでしょうか。移住を通し、環境が変わったことで以前と比べて不便になったと捉えることもできますが、それは無駄がそぎ落とされシンプルになった、とも解釈できます。環境の変化に自身の考えを溶け込ませ、うまく調和していくことが、移住の魅力かもしれません。